

謎多き倭国王帥升^{すいしょう}

全邪馬連会員 竹村紘一

帥升とは弥生時代中期～後期の倭国の王で、王国所在地は北部九州説が有力でとされている。帥升が日本史上、中国の史書に記載された最初の人物であり、帥升の次に現れるのが卑弥呼なので、大いに注目されてしかるべき人物であるが、史料も少なく余り知られていない。帥升が北部九州にいたと推定されることから、倭国大乱後、その王国の継承者と思われる卑弥呼の邪馬台国も北部九州に存在したのではないかと推定されることから、邪馬台国北部九州説を補強しているといえよう。帥升は、宋の范曄^{はんよつ}の著した『後漢書・東夷伝』によると、『永初元年(西暦 107 年)倭国王・帥升等生口百六十人を献じ、願いて見えんことを請う』と記されている。107 年とは卑弥呼よりも約五十年以上前のことである。范曄は、五世紀の宋の時代の人であるから、帥升よりもかなり後の時代の人物であるから元になる書物を参考にしたことであろうし、『三国志』を著わした陳寿も同じ書物を『魏志倭人伝』で引用したと推測されており、それは魚豢^{ぎょかん}の著わした『魏略』と考えられている。『魏略』とは三国時代の魏を中心に書かれた歴史書で、その中に邪馬台国時代の倭国に関する記述が多く残っていることから、多くの研究者が参考にしている貴重な文献となっている。

帥升については、『後漢書・東夷伝』には「倭国王」と記されている。『倭人伝』には、邪馬台国が対馬国や一支国^{いきこく}（『魏志倭人伝』では一大国^{いちたいこく}とされ、壱岐に比定される）を含め九州の北部を支配下に置いていると記されている。『魏志倭人伝』によれば対馬国を始めとする二十八ヶ国が邪馬台国の支配下に入ったのは、帥升の時代と推定されている。帥升は、『後漢書』の僅かの記述によれば倭国王を称した最初の人物で、「倭国」という表現もこの時に初めて現れていることから、この頃に、対外的に倭や倭人を代表する倭国と呼ばれる政治勢力が形成されたと

推定されている。一世紀末から二世紀初頭にかけて、列島各地の勢力がそれぞれ独自に倭国王を称していた可能性もあるが、倭国を代表する有力な政治勢力が生まれたと推定され、これ以降、七世紀末期までの間、倭・倭人を代表する政治勢力は、対外的には「倭国」を称し続けたようである。「日本」が国号となるのは、諸説あるが通説では天武天皇の時からであるとされている。天武天皇（生年不詳～686）は681年から『飛鳥浄御原令』の編纂を始めていたが完成前に死去し、跡を継いだ持統天皇（645-703）が689年に飛鳥浄御原令を完成させ施行した。法令の上で『日本という国号』、『天皇という地位・称号』が公式に設定されるためにはこの689年の飛鳥浄御原令であるから、日本の国号、天皇の正式な呼称の始まりは689年と考えられる。東アジアで大国中国に独立した国と認められるためには、古い歴史と国としての体裁を整えることが必須であったと思われ、天武は国史の編纂と律令の整備を急いだのであろう。

帥升以降、倭国王位は男子が継承したとされるが、その後に大乱が勃発したと推測される。二世紀後期になると倭国内で大規模な紛争が生じた（倭国大乱）。大乱は邪馬台国に居住する卑弥呼が倭国王に共立されることで治まったとされている。卑弥呼は240年代に亡くなり、その次には男子が倭国王となったが再び内乱が生じ、卑弥呼の宗女の臺與^{いよ}/壹與（台与）が倭国王に共立されて、漸く乱は終結した。しかしながら、『記紀』には邪馬台国も卑弥呼も記載されていないし、奴国や伊都国の存在についても記載がない。奴国王が後漢の光武帝に朝貢して「漢委奴国王」の金印を与えられたことも、倭国王（伊都国王とも）帥升が遣使したことも、卑弥呼が魏の明帝に遣使して「親魏倭王」の印綬を与えられた事も記述がない。大和朝廷とは無関係に存在した国の王であったのであろうか。或いは、大和朝廷では別の名で呼ばれていたのであろうか。卑弥呼と臺與^{いよ}の話は非常に類似した話であることや、邪馬台国と大和朝廷との関わり合いは、東遷や征

服も含めて極めて興味深い。卑弥呼や臺與いよの時代は大和朝廷十代とされる崇神天皇の時代とする説が有力である。

倭奴国わのなのくにの後漢への朝貢

帥升より五十年程前の 57 年に、倭奴国わのなのくにの大夫たいふが後漢へ朝貢し、倭奴国王は後漢の光武帝に王として承認され、金印と印綬を授けられた。『後漢書東夷伝』に「建武中元二年、倭奴国、貢を奉じて朝賀す。使人たいふ自ら大夫と称す。倭国の極南界なり。光武賜うに印綬を以てす」という記述がある。極南界とは諸説あるが邪馬台国とする説もある。これに比し、帥升は生口百六十人を献じて謁見を願ったとあるのみで、金印や印綬を賜ったとの記述が無い。このことから、倭奴国は後漢に王として承認されたが、帥升は王と認められなかったとする説がある。

一方、『後漢書』に「倭国王」と記載されていることから、倭国王として認められていたとする説もある。注目すべきは、永初元年（107 年）に帥升が漢に献上した生口の数である。後の景初三年（239 年）に邪馬台国の女王・卑弥呼が魏に献上した生口は男女合わせて十人であり、その後継者の壹与が献じた奴隸は三十人であったから、帥升の献上した百六十人は抜群に多いのである。生口は、奴隸の一種である。労働力としても貴重な存在であったと思われる。これだけの生口を献上するには、相当な勢力が不可欠であろう。戦争があれば、多くの生口を手に入れることが可能である。このことから、帥升はかなり規模の戦争の勝利者であったのではないかと推測される。また、帥升が何故に生口を百六十人も献じながら、王として認められなかったのかについて、一説には、筑後平野で勢力を拡大した面土国が奴国に侵攻して勝利して、面土国王の帥升等は、奴国から奪った戦争捕虜（生口）百六十人を漢への献上品として連行し、漢に倭の代表権とそれを証明する印綬を要求したが、漢は自国が宗主国として承認していた奴国を倒した面土国を不快に思い帥升に王位を与えなかったとする説がある。一理ある説で

ある。仮に帥升の国が漢を宗主国とする奴国を滅ぼしたとしたら、漢に事情を説明し了解を求める要がある。生口の献上と朝貢にはその意味も含まれていたのではないかと推測される。尚、帥升を倭国王とするものと面上国（面土国や倭面土国と同一説あり）とする等あり。さらには、帥升「等」と記述あることから帥升の他数名の王と一緒に朝貢したとの解釈もあり複数の王だとすれば、その一人を王として認めるのは難しいと思われる。尚、帥升の名前についても種々の論議がある。また、帥升は北部九州の王ではなく、大和朝廷の天皇であるとして、第四代懿徳天皇（大日本彦鍬友命）^{いとく おおやまとすきとものみこと}に比定する説もある。懿徳天皇の推定在位年（107～110年）と一致するがこれは要検討であろう。

また、「帥升」は当時の倭国にはなじまない名であるので、大陸や半島の人物ではないかとする説もある。当時の倭人が、音読みをしていたとは思えないからである。また、中国の方で勝手に付けた名前とも考えられる。「帥升王」^{すいしょうおう}や「始祖王」^{しそおう}が建国の祖とされるスサノオに音韻変化したとする説もある。年代的には首肯出来る面もあり興味深い説であるがこれも今後の検討課題となろう。

卑弥呼が魏に朝貢したのは、魏の司馬懿^{しばい}が遼東の公孫淵^{こうそんえん}を滅ぼし、帯方郡を手中に収めたので、魏に臣従の意思を示し後ろ盾になって貰おうと思ったからであろうが、それより遙か以前の帥升は、そのような脅威を感じる状況にはないので、帥升が生口を漢に献上したのは、単に自らの権力を誇示し、正式に漢から倭の国王と公認して貰いたかったのであろうとも推測される。

帥升の王国の所在地

帥升の国の所在地も北九州と推定したが、様々な説がありいずれも憶測の域を出ない。『後漢書』に「倭面土國王」とあり、通説では「倭國王」の誤記だと考えられている。この場合、倭国王とは、倭全体の国王ではなく、倭の『面上国』、『面土地』、『面土国』といった倭の中の一部の地域の国王の可能性も出て来る。

場所については複数の比定地がある。『先代旧事本紀』の国造本紀に、「筑志米^{つくしめ}
多^た国^{くに}造^{のみやっこ}」という記載が出てくるが、おそらく、佐賀県三養基郡米多郷^{みやきぐんめたごう}が所在地
だったと思われる。吉野ヶ里遺跡の近くでもあり、筑後平野一帯が支配地域で
あった可能性が高いと思われる。「筑志米多^{ちくしめたこく}国」が「面土国」の後継国と推定す
る説もある。研究者の中には、「倭面土國」という国が存在し「ヤマト」と読ん
だとして、現在の奈良県に比定しているが、一般には支持されていない。この他、
帥升は奴国王位を継承したとする説、伊都^{いと}国王（現在の福岡県糸島市）だったと
する説など諸説があるが、北部九州に所在していただろうという点では、大多数
の研究者が一致している。

筆者は帥升が何らかの形で奴国王位を継承し、その国が後年に卑弥呼の邪馬台
国に繋がったと考えているが、裏付けのある論を立てるには至っていない。古代
史の入り口は広いが奥行きも深いことを痛感する次第である。